

【研究ノート】

# 解離性障害の治療論：虐待トラウマから 愛着トラウマへの原因論の変遷を通して

赤坂和哉

## The Therapeutics of Dissociation Disorder: Through the Aetiological Transition from Abuse Trauma to Attachment Trauma

Kazuya AKASAKA

キーワード：解離、ヒステリー、トラウマ、虐待、愛着

### はじめに

解離の歴史を紐解くと、Janet, P. の業績が最初に挙げられていることが多い。例えば、「1889年にJanet, P. が『心理学的自動症』で *desagregation* [解離] という用語を使ったのが始まり」等と記されている。その中でJanet, P. (1889) は、心理学的に完璧な健康状態を「統合の力がきわめて強く、心理学的事象すべてが、その起源も含めて、個人的知覚に統合されている状態である」と述べて、それと対比した形で解離を「精神的統合の力が弱まり、かなりの数の心理学的事象がパーソナリティによる統合を離れて漏れ出ていくようになること」と記している。そして、この解離の程度によって、二つのパーソナリティが①完全には独立していない場合、②独立している場合、③相互依存的となる場合の三つの状態について言及している。Janet, P. が扱っていたのはヒステリーであり、19世紀後半におけるヒステリーは、現在では解離性障害、身体表現性障害、境界性人格障害、心的外傷後ストレス障害、ある種の精神病を含む広い概念であった。

DSM-5における解離症群には、解離性同一障害、解離性健忘、離人感・現実喪失症等が含まれている (American Psychiatric Association, 2013) が、本論では、解離をDSM-5における解離症群といった限定された意味で用いるのではなく、想像上の仲間 (imaginary companion)<sup>\*1</sup>も含めた<sup>\*2</sup>、白昼夢のような日常生活のマイナーな解離から、解離性同一性障害のようなメジャーで病的な解離までをスペクトラムとして捉えて、以下で、解離の主要な原因とメカニズムを歴史的に概観するこ

とを通して、解離に対する精神分析をベースにした治療的アプローチを整理することを目的とする。

### 解離という用語

19世紀後半におけるヒステリー研究の中で、Janet, P. が解離概念を提出したことは先に触れたが、この頃のヒステリー研究で忘れてはならないのは、Freud, S. の存在である。Janet, P. とFreud, S. はともに、トラウマと解離をヒステリーの病因の中心をなすものと考えていた (Howell, 2019)。

Janet, P. は、*desagregation psychologique* (心理学的解離) について記述した1889年の論文を例外として、仏語の *dissociation* (解離) という言葉を使っていた (Van der Hart, O., 2016)。Freud, S. は、1897年以降、基本的に独語の *Dissoziation* (英語では *dissociation*) という言葉を使うのを止めたが<sup>\*3</sup>、その代わりに主に独語の *Spaltung* (英語では *splitting*。以下「スプリッティング」と記載) という用語を使用して、生涯にわたる研究生生活を通じて解離の過程について書き続けた (Howell, 2019)。このスプリッティングという用語は、1895年のプロイアーとの共著『ヒステリー研究』からすでに使われており、その中で「意識のスプリッティング [分裂・解離]」といった表現で使用されている。

\*1 想像上の仲間とは、単純には、目には見えないが子どもが話しかけたり遊んだりする人物のこと。

\*2 想像上の仲間が、解離した人格と関連するという立場 (Grolnick, S. A., 1990) と、関連しないという立場 (Allison, R. & Schwarz, T., 1999) があるが、本論では、前者の立場に与する。

## 虐待トラウマ説

まずは Freud, S. の解離（スプリッティング）に関する考察を確認しよう。

彼は、「防衛—神経精神病」（1894）において、ヒステリーの特性としてスプリッティングを提示しつつ、「ヒステリーの病因論のために」（1896）等で、先に指摘したように、幼児期における性的暴行や性的交渉といったトラウマ体験をヒステリーの原因として想定していた<sup>\*4</sup>。

「いかなる症例、いかなる症状から出発しようが、最終的には不可避免的に〔トラウマ的な〕性的体験の領域に到達するということであります。これでもって初めて、ヒステリー症状の病因となる一つの条件が発見されたということになるでしょう」（Freud, S., 1896）。

そして、Freud, S. は解離性同一性障害に関する記述としては、以下のような一文を残している。

「対象同一化が優勢になり、あまりにも頻繁かつ激しくなると、それぞれどうしの折り合いがつかなくなると、病的な結末に行く着くのは火を見るよりも明らかである。それぞれの同一化が、抵抗によってはばまれて相互に受けつけなくなると、自我は分裂状態（Aufspaltung）に陥りかねないし、もしかしたら、いわゆる多重パーソナリティという症例の秘密も、それぞれの同一化が入れ代わり立ち代わり意識を占領してしまうところにあるのかもしれない」（Freud, S., 1923）。

Freud, S. はヒステリーの原因となる性的体験を現実起こったことではないと考えるようになるが、Ferenczi, S. は現実としてのトラウマに関する研究を推し進めた。それも一因で Freud, S. と対立するようになるが、Ferenczi, S. は実際の性的暴行や性的虐待が神経症の原因になると考えたのである。

そして、解離性同一性障害に関連すると思われる記述としては、子どもが大人から性的暴行や性的虐待といった攻撃をされると、次のようなメカニズムが生じると述べている。

「完全に自分自身を忘れ、子どもは自らを攻撃者と同一のもののみならず。その攻撃者への同一化、あるいは私たちに言わせれば、攻撃者の内在化を通して、攻撃者は外的現実としては消え失せ、精神—外のものではなく、精神—内のものとなり、その精神—内のものは、トラウマ性の忘我と同じ状態である夢のような状態で、一次過程の支配下

に置かれる。[・・・] 子どもの発達期に衝撃が積み重なっていくと、パーソナリティにおけるスプリットも増大し、多様となる。そしてやがてパーソナリティの断片のすべてと混乱することなくコンタクトを取ることが極めて困難となる。つまり、分離したあるパーソナリティが他のパーソナリティの存在を未だ知らないような状態で、パーソナリティの断片はそれぞれ振る舞うのである」（Ferenczi, S., 1949）。

Fairbairn, W. R. D. は、エジンバラ大学で青年心理学等を教えていたとき、大学付属の児童クリニックでも働き、非行少年や性的虐待を受けた子どもを治療していた（Burton, E. S., 2016）。Fairbairn, W. R. D. によると、性的虐待を受けた子どもは、悪い対象を内在化して、その後抑圧し、自我もスプリッティングされて抑圧されるという。Fairbairn, W. R. D. を引こう。

「ある内在化された悪い対象の抑圧は、問題となっているその対象にリビドー的な結び目で最も緊密に結びついた自我の部分の抑圧に導く。しかし、その対象がスプリットされていれば、自我の二つの部分もまた中心自我から切り離されることになる」（Fairbairn, W. R. D., 1949）。

そして、Fairbairn, W. R. D. (1949) は「もちろん、今私が検討している理論は、多重パーソナリティにおいて見出されるのと同じ最も極端な徴候を説明するのに言うまでもなく適している」と述べている。

以上のような主に性的暴力や性的虐待に中心化されたトラウマ体験が解離に結びつくという考えに基づいた治療法に関しては、次のようなものが

\*3 Freud, S. は「防衛—神経精神病」（1894）において、Janet, P. に従ってヒステリーの特性として分裂・解離（仏：désagrégation, 独：Spaltung, 英：dissociation）を提示しつつも、転換をヒステリーの特性として指摘し、耐えられない表象や観念に対する抑圧や防衛ということを書き、『ヒステリー研究』（1895）において「ヒステリーは防衛という動機から耐え難い表象を抑圧することで発生する」と記しているように、防衛と抑圧の関係を整理していき、その後抑圧を中心的な言葉として用いるようになる。そして、「精神分析について」（1910）において、Freud, S. は Janet, P. とは見解の相違があることを示唆し、分裂・解離（Dissoziation, Spaltung）ではなく抑圧という防衛機制に重きを置いた。

\*4 例えば、Freud, S. は大人の男性から女の子への性的暴行や大人の女性から男の子への性的誘惑等に言及している。これがいわゆる「誘惑理論」と言われるものの根幹であり、よく知られているように、Freud, S. はのちに、こうした性的体験を現実ではなく幻想であると考へたとされている。

ある。

Putnam, F. W. (1989) は、患者の安定化に向けて、パーソナリティ組織内部のコミュニケーションを促進しつつ、継続的に治療を混乱させる転移-逆転移<sup>\*5</sup>に対処してトラウマ体験の感情と記憶を意識化することが心理療法において重要であると述べた。

Kluft, R. P. (1991) は、安全な雰囲気醸成や治療同盟<sup>\*6</sup>から始めて、マッピング、心的トラウマの消化、統合・解消、徹底操作<sup>\*7</sup>等を経て、フォローアップで終わる、段階的な治療を提案した。

Herman, J. L. (1992) は、エンパワーメントの原則に従って、繰り返しトラウマに端を発する転移-逆転移関係を乗り越えながらトラウマの出来事を再構成するといった治療過程を明示した。

以上のような治療的なアプローチで共有されている考え方としては、基本的には患者が安心や安全を感じる関係性を基礎に、治療を混乱させる転移-逆転移関係に対処しつつ、トラウマ体験を再構成していく、というものだと言えよう。

### 対象関係論における展開

Fairbairn, W. R. D. が提唱した「対象関係論」の潮流においては、Klein, M.とWinnicott, D. W.の解離に関連する部分を少しだけ確認したい。彼らは基本的には、通常の発達の途上で解離に至る可能性があると考えている。

Klein, M. (1946) は「早期自我には結合力が著しく欠如していて、統合へ向かう傾向と細分化し解体の方へ向かう傾向とが、交互に生じる」と早期自我の傾向に言及し、「早期のスプリッティングのプロセスにおいて、断片化の過程が、さほど支配的なものとなっていないことが、精神的な健康やパーソナリティの発達にとっていかに重要か」(Klein, M., 1957)と指摘している。そして、細分化・断片化が精神分裂病〔統合失調症〕に至ることや退行によって離人状態や解離に至るという見方を示している。

「この自我の細分化が精神分裂病の解体状態の基礎であるようにみえる。[...] 内部の破壊力によって絶滅させられるという一次的不安は、自我の細分化つまりスプリッティングそのものという自我に特有な反応とともに、精神分裂病のすべての過程にとってきわめて重要である」(Klein, M.,

1946)。

「自我が分裂とその結果生じる解体に打ち勝つことができなくて、余りにもしばしば、そして、余りにも長くそのような状態が続く場合には、私の見解によれば、それは、乳児における精神分裂病性疾患の徴候とみなさなければならない。そのような疾患の何らかの指標は、生後数カ月の間にすでに見いだせるといえよう。患者が成人の場合、離人状態と精神分裂病性の解離は、このような乳児期における解体への退行と思われる」(同上)。

解離性同一性障害に関連することとしては、上記で Klein, M. が言及したスプリッティングの結果生じる、スプリットされた自己や対象を別人格(alter)と見なすことができるかについて O'Neil, J. A. (2009) は次のように述べている。「内的対象<sup>\*8</sup>は現実として彼ら自身の意志とともに体験されているように思える。幻想化された内的情景にあるスプリットされた自己や対象のセットは心的構造を構成している。[...] そして、内的対象や自己のスプリットされた諸部分は解離性の別人格のようである」。

Winnicott, D. W. (1949) は、侵襲<sup>\*9</sup>によって自己の存在することの連続性が失われることを危惧する。「発達中の精神-身体が存在することの連続性(内的、外的関係)は、環境の侵襲に対する反応、換言するならば環境が積極的に適応することに失敗したことの結果により、妨害される。[...] 過度の反応を要求するような侵襲は、許容されないのである。混乱は別にして、起こりうることといえば、せいぜいその反応を目録化(cataloguing)できるということである。[...] 目録化は予想をこえた環境の適応失敗にともなうものなら、異物のように振る舞う」。そして、この後の議論は偽りの自己に関するものとなっていく。

\*5 転移とは、患者が無意識に自らの幼児期の体験や感情等を治療者に向けること。また、逆転移とは、治療者が無意識にかつての体験や感情等を患者に向けること。

\*6 治療同盟とは、精神分析において、治療者と患者が治療の目標とそのための作業に合意し、主にポジティブな感情に基づいて協力していく関係のこと。

\*7 精神分析では、単純には治療者の解釈によって患者は洞察を得て自らを知っていくが、徹底操作とは、その際に繰り返し現れる患者の抵抗を、解釈と洞察によって克服していく過程のこと。

\*8 内的対象とは、内在化によってパーソナリティの内部に移動された対象のこと。

\*9 侵襲とは、子どもの欲求に十分に応じることのない、ひとりよがりな母親の態度のこと。

このようなWinnicott, D. W.の議論を引き継ぎ、細澤 (2008) は、環境の侵襲で存在することの連続性が失われることで、情緒発達の停止にいたり、それが解離性障害の脆弱性をなす、と考えた。そして、解離性障害の治療に関して、中核的葛藤を転移解釈を用いて徹底操作していく中で、トラウマ記憶を直接取り扱うのではなく、精神病水準の不安を治療関係の中で抱えていくことを通して、患者の自然治癒力の発現を援助するというアプローチを示した (細澤, 2003)。

Marmer, S. S. は、Winnicott, D. W. の移行対象を別人格理解や治療法に接続した。「自我のスピリットは、工夫に富む防衛であるだけでなく、いくつかの重大な分離や喪失といったトラウマを患者が自らを移行対象として使用することで越えていく高度な適応的な方法なのである。[...] 移行対象として自己を使用する」(Marmer, S. S., 1980)。そして、自己を利用することの重要性を「落ち着かせてくれる人がいず、そうした物もなく、また、良い対象が欠乏しているときに、多重パーソナリティ障害患者には特有のジレンマが生じる。私見では、別人格が作り出される一つの側面としては、移行対象が必要とされるということがある。[...] 多重パーソナリティ障害患者にとって別人格は、心をかき乱したり、崩壊するぐらい混乱させる行為の際にも、気持ちを落ち着かせる」(Marmer, S. S., 1991) と述べ、「セラピーでは、治療者はそれぞれの別人格にとっての移行対象となる機会を持つ。[...] 多重パーソナリティ障害患者の治療では、治療者は移行対象として多面的な役割を務める」(同上) という治療論を提出した。

このようなスタンスから、Marmer, S. S. (1991) は、治療同盟を確立し、治療者が移行対象の役割を引き受けることで、別人格にまつわる記憶が想起され、転移-逆転移の中で患者が自らを知っていくという治療的な方向性を示している。

ここまでに見てきた対象関係論に基礎を置く治療論は、広くとらえた場合、Klein, M. (1955) が「内在化された良い乳房は、良い感情がそこから外的対象に投射されるころの自我内の焦点として、作用する。それは、自我を強化しスピリットと分散の過程に拮抗して、統合と総合の能力を高める。内在化された良い対象は、このようにして、統合され安定した自我にとっての [...]

前提条件の一つである」と述べているように、良い対象やそのヴァリエーションを機能させることであると言えよう。つまり、Marmer, S. S. の移行対象の利用や細澤の抱える機能の重視は、良い対象を機能させることの延長上にある治療論と見なすことができるだろう。

### 愛着トラウマ説

先に見たMarmer, S. S. (1991) は「トラウマ、葛藤、欠乏のすべてが多重パーソナリティ障害の発生に寄与する役割を演じている」と述べており、多重パーソナリティ障害の文献ではトラウマ体験が重視されていることを強調しつつも、内的葛藤と内的緊張にも重きを置いた。このような解離の原因にトラウマだけを想定するのではない考え方は、その後広がりを見せていく。それは、Klein, M. やWinnicott, D. W. が示した発達に関連する解離という見方であり、対象関係論と対人関係学派が合流した関係学派 (関係精神分析) においてそれは顕著である。彼らは愛着理論を一つの理論的な基礎に据えている。

まずはベースとなる愛着理論の流れを簡単に確認しよう。

愛着に関する研究は、Bowlby, J. に端を発している。Bowlby, J. は、Klein, M. からスーパービジョンを受けていたが、Klein, M. が患者の無意識的幻想をひたすら重視し、現実の経験が発達に影響を及ぼすことを重んじないことに強い違和感を抱き、Klein, M. とは袂を分かつことになった。そして、Freud, A. の著作の影響を受け、母性剥奪に言及した『乳幼児の精神衛生』を著した。

Bowlby, J. の研究を引き継いで、Ainsworth, M. D. S. ら (1978) は新奇場面法 (SSP: strange situation procedure)<sup>\*10</sup> によってA、B、Cという3つの愛着パターンを提唱した<sup>\*11</sup>。そして、Main, M. とSolomon, J. (1986) は4つ目のD型と言われる無秩序型愛着 (disorganized attachment) を見いだした。このD型の子どもは、新奇場面法で親と再会したときに、一貫性がなく極

\*10 新奇場面法とは、単純には、乳児と親を引き離し、親との再会時に乳児がどのような反応を示すかで愛着を測定する方法のこと。

\*11 A型 (回避型) は親との再会時に親を避けたりする。B型 (安定型) は親との再会時に喜んで親を歓迎する。C型 (両価型) は親との再会時に親に近づいたり親を嫌がったりする。

端に混乱した様子を示す。例えば、まったく無反応だと思っていると急に激しく泣いたりするのである。

Bowlby, J. に影響を与えた Freud, A. の系譜に連なる Fonagy, P. (2001) は、無秩序型愛着と解離に関する研究をレビューし、無秩序型愛着の歴史を有する人は、自らの誕生前後に親が重大な喪失を経験した場合や、自らの誕生後すぐに母親といった愛着対象の死等を経験した場合には、解離症状を呈しやすいくということに触れている。

Bowlby, J. と考え方が近く親交があった Liotti, G. は、無秩序型愛着を基にした解離モデルを提唱している。Liotti, G. を引こう。

「無秩序型愛着においては、多重な情報をまとめた自己一表象に統合する傾向はうまく機能しない。このことは、解離性の精神状態が人生の始まりにおいて愛着システムの作用と結合して出現することを仄めかしている。[・・・] 解離は少なくとも人生の始まりにおいて、精神的苦痛に対する精神内の防衛というよりも、対人間の対話過程に基礎がおかれているように思える」(Liotti, G., 2006)。

「早期の無秩序型愛着は解離の二つの基本的な側面を形作る。その二つとは、普通ではない意識的な体験をすること(換言すればトランス様状態)と通常はまとまった一つのものとして構成される現実の側面が同時的な多重な表象となることである」(同上)。

そして、Liotti, G. (2006) によれば、先の Fonagy, P. の指摘と同様に、このような人生早期における無秩序型愛着が解離の基礎を作ることで、その後のトラウマ体験が病理的な解離につながっていくという。「乳幼児の愛着の混乱・無秩序は、それ自体のうちに解離的な過程があり、後年のトラウマや人生上のストレス因に対してその個人を病理的な解離でもって反応しやすくさせる」<sup>\*12</sup>。

愛着が解離の基礎にあることで、その治療的スタンスは、安全基地 (secure base)<sup>\*13</sup> を作るということになる。Liotti, G. (2006) は、まず第一に治療的關係や他の重要な対人関係において愛着の安定性 (attachment security) が獲得されるようにし、その後、トラウマ作業を行うという心理療法を提案している。

つづいて関係学派的解離に関する貢献を概観しよう。

Bromberg, P. M. (2011) は、発達性トラウマや関係性トラウマに触れつつ、人間が愛着パターン等の関係の慢性的な在り方に情緒的に耐えられない場合、そうした体験は一つの自己一状態として解離されて、対人関係上で行為として表現される (enactment) と述べている。彼は Sullivan, H. S. の伝統を引き継いで自己の多重性を主張し、解離された部分を私でないもの (not-me) と呼んでいる。

Stern, D. B. (2010) は、Bromberg, P. M. の見解を踏襲し、私でないもの等の未構成の経験 (unformulated experience) は解離されていて、それはエンナクトメント (enactment) として対人関係に外在化されて経験されると論じている。

彼らは、病理的な強い意味での解離から普通の弱い意味での解離までに関して述べているが、力点は普通の弱い解離に置かれている。換言すれば、関係性トラウマによって解離を一般化したと言ってもよいだろう。この一般化は、自己の捉え方にも端的に見て取れる。先に少しだけ触れたように、彼らは元々自己とはバラバラで多重的であるという立場を取っているのである。

例えば、Bromberg, P. M. (1996) は「解離は、抑圧のように、人間の心や精神の健全で適応的な機能である。[・・・] 解離は、本来人間が個人的な連続性や一貫性、自己という感覚の統合感を維持する一手段である。[・・・] まとまった自己が存在しているという体験は、後天的で発達的に適応的な幻影である」と述べている。<sup>\*14</sup> そして、Stern, D. B. (2010) は解離の目的論と呼べるようなさらに急進的な立場を表明している。「解離理論において私たちが無意識的な防衛へと向かわせるものは、一定のアイデンティティを身に帯びることを回避したいという欲求なのである。その無意識的な目的は、一定の存在のあり方あるいは自己のあり方が生まれることを回避することである」。

上記のような考えにもとづく治療的なアプロー

\*12 Liotti, G. (2006) は、このような観点に立って、解離性障害と、解離を含んだ境界性パーソナリティ障害や心的外傷後ストレス障害といった他のトラウマ関連障害に関する、愛着モデルを提示している。

\*13 安全基地とは、母親などが子どもに対して与える心地よさや安心感などが保証された環境のこと。

\*14 ここまでの議論からも推測されるように、Liotti, G. (2006) も「自己一表象の統一性は、生来的にあるというよりも、統合的な過程を通して達成されるのである」と述べ、同じ立場に立っている。

チとして、Stern, D. B. (2010) は、分析家の行為と患者の行為の中にエンナクトメントを探し求め、解釈学<sup>\*15</sup>のGadamerが言うところの真の対話 (echten Gespräch/authentic or ture conversation)<sup>\*16</sup>を回復しようと努め続けることを提唱しており、その中で患者が語ったことに情緒的に応答して関心を払ってくれると感じる立会人 (witness) として分析家が存在していることで「事後的に情動のおよび関係的なコンテクストが変化したこと気づく」という。

### おわりに

「やがて私たちは、多くの素晴らしい分析に共通の失敗は患者の解離と関連している、という結論に至らざるを得ないだろう。解離は、うわべは欠けたところのない全体としての人間において防衛として起こる抑圧に明らかに関連した素材の中に隠されている」。

これは、Abram, J. (2012) によれば、Freud, S. の業績を前進させるために、Winnicott, D. W. が1971年に抑圧よりも解離を前面に置いた証左である。確かに、Freud, S. は解離 (Dissoziation) という言葉から離れ、抑圧を強調したがFreud, S. および精神分析においては解離はスプリッティングとして語られてきた側面がある。本論では、その点も考慮しつつ、解離性障害の原因やメカニズムに関する議論の変遷を概観した。

端的には、虐待トラウマから愛着トラウマへという原因論における強調点の変化があり、この原因論の変遷の中で、上述のWinnicott, D. W. の予見のように、解離が人間の精神の構造や働きに広く影響を及ぼしていると考えられるようになっていくが、本論ではそれを「解離の一般化」として捉えた。そして、そのような変遷に伴って、心理療法のアプローチが、トラウマ体験の再構成や別人格に触れることおよび人格の統合を重要視するよりも<sup>\*17</sup>、安定した環境や関係性を回復することに主眼が置かれようになってきたのであった。

岡野 (2007, 2015) は、治療者が一定の環境を提供し、別人格には必要以上に触れないが、場合によってはマッピングや詳細な生育歴の聴取などの工夫をしつつ、別々に分かれているパーソナリティの記憶や体験といった情報を共有する、つなげる作業を提唱した。そして、国際トラウマ解離研究学会 (2011) が言及している、パーソナリティ

の統合ではない機能の統合が、つなげる作業を地道に行っていくことで達成されると岡野は考えており、この機能の統合を治療の目標にしている。

ここまで論じてきた治療論の変遷を下地とすれば、以下の三点を含んでいることが、現在のところの解離性障害に対する妥当なアプローチと見なすことができるだろう。1) 近年強調される愛着理論をベースにした、一定の環境といった安定的な関係性、2) 近年はそれ程重要視されないが、必要性に応じた別人格等への接触といったトラウマ体験の再構成につながっていく作業、3) 「解離の一般化」に見られる、一つのパーソナリティという考えに拘わらない機能の統合という目標。

### 註記

本論における引用文では、本論の理解を容易にするために、邦訳のある文献や外国語の専門用語に関して、適宜、訳語を変更・修正した。また、[ ] は本論著者による補足を示している。

### 文献

- Abram, J. (2012) : D. W. W.'s Notes for the Vienna congress 1971 : A consideration of Winnicott's theory of aggression and an interpretation of the clinical implications. In Donald Winnicott Today (pp. 302-330). Routledge, London.
- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978) : Patterns of Attachment : A Psychological Study of the Strange Situation. Lawrence Erlbaum, New Jersey.
- Allison, R. & Schwarz, T. (1999) : Minds in Many Pieces: Revealing the Spiritual Side of Multiple Personality Disorder. Cie Publishing, Paso Robles.
- American Psychiatric Association (2013) : Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders: DSM-5. American Psychiatric Association Publishing, Washington, DC. 日本精神神経学会

\*15 解釈学とは、テキスト、文化、人間等に関する解釈や理解の方法・働きに関する哲学の一領域のこと。

\*16 真の対話とは、お互いに語られる内容に一致を見だし、共通の意味として相互に理解し合うこと。

\*17 例えば、Putnam, F. W. (1989) は、治療のゴールと通常考えられているのは人格全体の統合であると当時の状況を述べつつ、彼自身としては、統合を治療の中心にするのではなく、非適応的な反応や行動をより適切な形に変えていくことを治療目標とした。

- (監修) (2014) : DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル. 医学書院, 東京
- Bowlby, J. (1952) : Maternal care and mental health, 2nd edition. Bulletin of the World Health Organization 3, 355-533. 黒田実郎訳 (1967) : 乳幼児の精神衛生. 岩崎学術出版, 東京
- Bromberg, P. M. (1996) : Standing in the spaces : The multiplicity of self and the psychoanalytic relationship. Contemporary Psychoanalysis 32, 509-535
- Bromberg, P. M. (2011) : The Shadow of the Tsunami: and the Growth of the Relational Mind. Routledge, New York. 吾妻荘訳 (2014) : 関係するところ：外傷、癒し、成長の交わるころ. 誠信書房, 東京
- Burton, E. S. (2016) Ronald Fairbairn, Our Authors and Theorists. The Institute of Psychoanalysis, British Psychoanalytical Society. <https://psychoanalysis.org.uk/our-authors-and-theorists/ronald-fairbairn> (2019年12月24日閲覧)
- Fairbairn, W. R. D. (1949) : Steps in the development of an object-relations theory of the personality. In Psychoanalytic Studies of the Personality (pp.152-161). Routledge, London, 1952. 山口泰司訳 (1992) : 人格の対象関係論にいたる発展的な歩み. 人格の精神分析学的研究. 文化書房博文社, 東京
- Ferenczi, S. (1949) : Confusion of the tongues between the adults and the child. International Journal of Psycho-Analysis 30, 225-230 森茂起・大塚紳一郎・長野真奈訳 (2007) : 大人と子どもの間の言葉の混乱 — やさしさの言葉と情熱の言葉. 精神分析への最後の貢献 — フェレンツイ後期著作集 — . 岩崎学術出版, 東京
- Fonagy, P. (2001) : Attachment Theory and Psychoanalysis. Other Press, New York. 遠藤利彦・北山修訳 (2008) : 愛着理論と精神分析. 誠信書房, 東京
- Frued, S. (1894) : Die Abwehr-Neuropsychosen. G. W. I. 渡邊俊之訳 (2009) : 防衛—神経精神病. フロイト全集1. 岩波書店, 東京
- Frued, S. (1895a) : Entwurf einer Psychologie. G. W. Nachtragsband. 総田純次訳 (2010) : 心理学草案. フロイト全集3. 岩波書店, 東京
- Frued, S. (1895b) : Studien uber Hysterie. G. W. I. 芝伸太郎訳 (2008) : ヒステリー研究. フロイト全集2. 岩波書店, 東京
- Frued, S. (1896) : Zur Aetiologie der Hysterie. G. W. I. 芝伸太郎訳 (2010) : ヒステリーの病因論のために. フロイト全集3. 岩波書店, 東京
- Frued, S. (1910) : Uber Psychoanalyse. G. W. VIII. 福田覚訳 (2007) : 精神分析について. フロイト全集9. 岩波書店, 東京
- Frued, S. (1923) : Das Ich und das Es. G.W. XIII. 道旗泰三訳 (2007) : 自我とエス. フロイト全集18. 岩波書店, 東京
- Grolnick, S. A. (1990) : The Work and Play of Winnicott. Jason Aronson Inc., New York. 野中猛, 渡辺智英夫訳 (1998) : ウィニコット著作集別巻2. 岩崎学術出版, 東京
- Herman, J. L. (1992) : Trauma and Recovery: The Aftermath of Violence — From Domestic Abuse to Political Terror. Basic Books, New York. 中井久夫訳 (1996) : 心的外傷と回復. みすず書房, 東京
- Howell, E. F. (2019) : From hysteria to chronic relational trauma disorder. In Moskowitz, A., Dorahy, M. J., & Schafer, I. (Eds.), Psychosis, Trauma and Dissociation: Evolving Perspectives on Severe Psychopathology, 2nd Edition (pp. 83-94). John Wiley and Sons, Hoboken.
- 細澤仁 (2003) : 解離性同一性障害の精神療法 — 終結3症例を通して. 神戸大学保健管理センター年報 23, 73-82
- 細澤仁 (2008) : 解離性障害の治療技法. 岩崎学術出版社, 東京
- International Society for the Study of Trauma and Dissociation (2011) : Guidelines for treating dissociative identity disorder in adults, 3rd revision. Journal of Trauma & Dissociation 12 (2), 115-187
- Janet, P. (1889) : L'automatisme psychologique : Essai de psychologie experimentalesur les formes inferieures de l'activite humaine. Felix Alcan, Paris. Reedition du texte de la 4e edition. Societe Pierre Janet et le Laboratoire de psychologie pathologique de la Sorbonne avec le concours du CNRS, Paris, 1973. 松本雅彦

- 訳 (2013) : 心理学的自動症. みすず書房, 東京
- Klein, M. (1946) : Notes on some schizoid mechanisms. *International Journal of Psycho-Analysis* 27, 99-110. 狩野力八郎・渡辺明子・相田信男訳 (1985) : 分裂的機制についての覚書. メラニー・クライン著作集 4. 誠信書房, 東京
- Klein, M. (1955) : On Identification. In Klein, M., Heimann, P., & Money-Kyrle, R. E. (Eds.), *New Directions in Psycho-Analysis* (pp. 309-345). Tavistock, London. 伊藤洸訳 (1985) : 同一視について. メラニー・クライン著作集 4. 誠信書房, 東京
- Klein, M. (1957) : Envy and gratitude. In *The International Behavioural and Social Sciences Library: Classics from the Tavistock Press, Psychology 6*. Routledge, London, 2001. 松本善夫訳 (1996) : 羨望と感謝. メラニー・クライン著作集 5. 誠信書房, 東京
- Kluft, R. P. (1991) : Multiple personality disorder. *American Psychiatric Press Annual Review of Psychiatry* 10, 161-188
- Liotti, G. (2006) : A model of dissociation based on attachment theory and research. *Journal of Trauma & Dissociation* 7 (4), 55-73
- Main, M., & Solomon, J. (1986) : Discovery of an insecure-disorganized / disoriented attachment pattern: Procedures, findings and implications for the classification of behavior. In Brazelton, T. B., & Yogman, M. (Eds.), *Affective Development in Infancy* (pp. 95-124). Ablex Publishing, Norwood.
- Marmer, S. S. (1980) : Psychoanalysis of multiple personality. *International Journal of Psycho-Analysis* 61, 439-459
- Marmer, S. S. (1991) : Multiple personality disorder: A psychoanalytic perspective. *Psychiatric Clinics of North America* 14 (3), 677-693
- 岡野憲一郎 (2007) : 解離性障害 — 多重人格の理解と治療. 岩崎学術出版, 東京
- 岡野憲一郎 (2015) : 解離新時代 — 脳科学、愛着、精神分析との融合 — . 岩崎学術出版, 東京
- O'Neil, J. A. (2009) : Dissociative multiplicity and psychoanalysis. In Dell, P. F., & O'Neil, J. A. (Eds.), *Dissociation and the Dissociative Disorders: DSM-V and Beyond* (pp. 287-325). Routledge, New York.
- Putnam, F. W. (1989) : *Diagnosis and Treatment of Multiple Personality Disorder*. Guilford Press, New York. 安克昌, 中井久夫訳 (2000) : 多重人格性障害. 岩崎学術出版, 東京
- Stern, D. B. (2010) : *Partners in Thought: Working with Unformulated Experience, Dissociation, and Enactment*. Routledge, New York. 一丸藤太郎訳 (2014) : 精神分析における解離とエナクトメント: 対人関係精神分析の核心. 創元社, 大阪
- 氏原寛・成田善弘・東山紘久・亀口憲治・山中康裕 (編集) (2004) : 心理臨床大事典, 改訂版. 培風館, 東京
- Van der Hart, O. (2016) : Pierre Janet, Sigmund Freud, and dissociation of the personality: The first condensation of a psychodynamic depth psychology. In Howell, E. F., & Itzkowitz, S. (Eds.), *The Dissociative Mind in Psychoanalysis: Understanding and Working with Trauma* (pp. 44-56). Routledge, New York.
- Winnicott, D. W. (1949) : Mind and its relation to the psyche-soma. In *Collected Papers: Through Paediatrics to Psycho-Analysis* (pp. 243-254). Tavistock, London, 1958. 北山修監訳 (2005) : 心とその精神—身体との関係. 小児医学から精神分析へ—ウィニコット臨床論文集. 岩崎学術出版社, 東京